

Title	投書欄の少女たち：ドイツ少女雑誌における読者像
Sub Title	Mädchenbilder Leserinnenbriefe der Mädchenzeitschrift "Das Kränzchen"
Author	細井, 直子(Hosoi, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.2 (2006. 12) ,p.213- 230
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Essays in Honour of Profrssor Takahiro Shibata
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投書欄の少女たち
—ドイツ少女雑誌における読者像—

Mädchenbilder
—Leserinnenbriefe der Mädchenzeitschrift »Das Kränzchen«—

細井 直子
Naoko Hosoi

1. 少女雑誌概要

ドイツで最初の少女雑誌が誕生したのは、18世紀後半である。18世紀前半からヨーロッパで流行した市民向け道徳週刊誌は、女性をも啓蒙の対象として取り込み、読者としての女性、さらに書き手としての女性を生み出していた。これを受けて、まずフランスのポーモン夫人による少女向けの雑誌『ためになる子供の雑誌』(1756)のドイツ語版が紹介され(1758)、つづいてドイツでも『ドイツの少女に』(1781/82)、『ポモーナ』(1783/84)、『アマーリエンの休み時間』(1790 - 92)などの少女雑誌が生まれた。

19世紀後半から20世紀初めにかけて、女子教育に関する問題意識の高まり、印刷技術の向上による書籍市場の拡大などを背景として、少女雑誌は最盛期を迎える。その代表的なものとして、『令嬢アルバム』(Töchteralbum; 1854-1931)、『クレンツヒェン』(Das Kränzchen; 1889-1934)、『ドイツの少女の本』(Deutsches Mädchenbuch; 1892-1925)、『五月の頃』

(*Maienzzeit*; 1891-94)、『若き少女に』(*Für junge Mädchen*; 1892-95)、『若き少女』(*Junge Mädchen*; 1895-1902) などがある。雑誌ごとにそれぞれ特徴があるが、いずれも教育的な意図から編まれており、道徳的訓話、物語、小説、メルヘン、詩、戯曲、伝記、歴史、美術工芸史、自然科学読み物、女性の職業に関する記事、旅行記、手芸、料理、衛生、なぞなぞ、イラスト、写真などを内容としていた。読者は主として良家の子女、すなわち富裕な市民層もしくは貴族の娘たちであった。また「雑誌」とはいても、今日私たちが想像するような、紙質の悪い安手のものではなく、布装に金文字を入れるなどの豪華な装丁を施されている。年刊雑誌の場合には、クリスマスプレゼントとして親から娘に贈られることも多かった。

2. 雑誌『クレンツヒェン』の投書欄

本稿では上記の少女雑誌の中から、シュトゥットガルトの出版社であるユニオンドイツ社 (Union Deutsche Verlagsgesellschaft) 発行の週刊少女雑誌『クレンツヒェン』(図1)における投書欄を取り上げる。『クレン

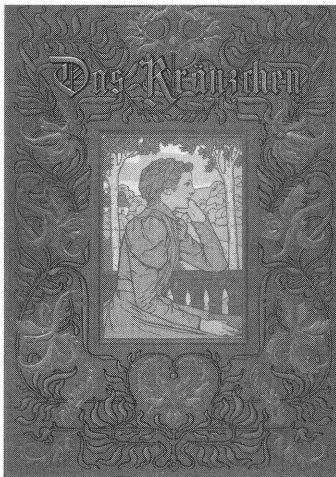


図1：『クレンツヒェン』第15巻表紙

ツヒェン』は、他誌に比べて商業的・娯楽的傾向の強い雑誌であると同時に、ファッションや女性の社会進出についても積極的に紹介するなど、自由で進歩的な側面を持つ雑誌でもあった。雑誌は毎号本文16ページからなり、少し厚めの表紙で簡易製本されて、毎週土曜日に定期購読者のもとに届けられた。『クレンツヒェン』には別売りで、一年分(計52号)を一巻の本としてまとめて綴じることのできる立派な表紙もあった。投書欄および若干の広告には、

この仮の表紙・裏表紙の裏側、計2～3ページ分が充てられていたが、上記の製本の際にそれが取り除かれてしまっている場合が多い。このように投書欄はいわば「欄外」の扱いであり、残念ながらそのかなりの部分が散逸してしまっている。筆者がこれまで実際に投書欄を確認できたのも、全46巻(1888/89-1933/34)のうち、4巻(1891/92)から21巻(1909/10)までの8巻分にすぎない。おそらくこうした保存状態の悪さもあって、フォスによる雑誌『クレンツヒェン』に関する論考の中で概括的に触れられている以外は、この投書欄はこれまでほとんど注目されてこなかった。¹しかしながら投書欄は、雑誌本文からはわからない読者の実像を窺い知ることのできる貴重な手がかりであり、書き手から読者へ、読者から書き手へという双方向メディアとしての雑誌の全体像をつかむ上で、重要な示唆を与えてくれる。もちろんこの雑誌が週刊という比較的速いスピードで発行されていたことも、その双方向性を支える条件であったにちがいない。編集部が繰り返し断っているように、読者の投書が編集・印刷などの作業を経て誌面で紹介されるまでに、最短で4週間かかった。それでも読者はせっせと投書を送り、編集部からのコメントや、他の読者からの返信を心待ちにした。号を追うごとに投書の数はふくれあがり、雑誌側は編集コスト削減のために投書欄をなくすことも考えたが、読者の人気に圧されて継続したという。

投書欄は大きく分けて、おしゃべり、文通相手の募集、物品交換の申し込みの三つから成っている。おしゃべりコーナーの内容は、読者同士の誌面での通信(初めて投書する読者の自己紹介、クレンツヒェン結成の呼びかけ、音信不通になった文通相手に消息を尋ねる、など)、家族や友人・知人へのプレゼントの相談、家事に関する助言を求める相談(衣服や絨緞についたシミの落とし方、家具や床の磨き方、など)、美容に関

¹ Irmgard Voß, *Wertorientierungen in der bürgerlichen Mädchenerziehung am Beispiel der illustrierten Mädchenzeitung „Das Kränzchen“ 1888/89-1933/34*. Hamburg, 1997, S.37ff.

する相談（そばかす、ヒゲ、手指や爪を美しくする方法など）、自作の詩やなぞなど、手芸作品の作り方、女子寄宿学校やその他の高等教育機関についての問い合わせなどである。交換される物品は切手、絵葉書、便箋・封筒、お菓子の付録、名刺、読者の写真、モノグラム、しおり、押し花、雑誌や広告イラストの切り抜き、コイン、錫箔など多種多様である。

文通および物品交換を求める投書には、読者の年齢や居住地が明記されており、雑誌の頒布状況がある程度知ることができる。これによれば、『クレンツヒェン』の読者は10歳前後から20歳代前半の少女ないし若い女性である。読者の居住地域はドイツを中心として、オーストリア、スイス、ロシア、ポーランド、ハンガリー、チェコ、ベルギー、フランス、イギリスなどの近隣諸国、また少数ながら北欧、北米、南米、アフリカ、中東、中国、日本にも読者がいた。ドイツの帝国主義的世界政策とともに、読者の範囲も時代を追うごとに拡大していった様子が窺える。

3. 投書欄の実際

●クレンツヒェンとは

ドイツ語でもともと「小さな花環」を意味する「クレンツヒェン」(Kränzchen)とは、当時上流階級の少女たちの間で流行していたお茶会のこと、数人のメンバーが誰かの家に定期的集まっては、読書・劇・詩作・手芸・おしゃべりにいそしんだ。創刊号に掲げられた以下のモットーが示すように、クレンツヒェンという誌名も、この雑誌が少女読者たちの集う「場」として想定されていることを表すものであろう。

「ねえお母様、クレンツヒェンに行ってもいい？　ありがとうございます！　お母様はなんてお優しいんでしょう。愛すべき忠実なお友達と共に過ごせると思うと、私はなんて幸福な気持ちになれることでしょう！　そんな少女たちの声が、日曜日ごとにこの広いドイツ帝国と、ドイツ語が話されるはるか遠くの国々から聞こえてきます。すべてのドイツ人の少女たち

に私たちの『クレンツヒェン』が届くよう願います。『クレンツヒェン』は毎週、楽しいお友達の輪を作りたいのです (…)] (『クレンツヒェン』第1巻)

投書欄には、雑誌に倣って近隣に住む読者に対してクレンツヒェンの結成を呼びかける投書や、最近自分たちもクレンツヒェンを結成したので、参考までに他の読者の属するクレンツヒェンの会則を教えてほしい、といった投書が後を絶たない。各クレンツヒェンには好みの名前 (森の小花、プラハの黒いクロバー、ウィーン記念同盟など) がつけられ、独自の会則があった。たとえば「陽気なマルハナバチ」(お転婆娘の意) というペンネームの読者は、問い合わせのあった3人の読者に対して、自分が属しているクレンツヒェンの会則を紹介している (第4巻20号)。これによれば、会長は最年長者が務めること、会則の遵守、真の友情と友愛、メンバーの間に秘密があってはならないこと、だれかが秘密を打ち明けた場合には他言は絶対に無用であること、会合は決まった曜日に行くこと、もてなしの内容 (コーヒー、パン、バター、ジャム、例外は誕生日と祝日のみ) と活動内容 (手芸、読書、音楽、その他の娯楽)、決定は多数決によって行われ、同数の場合は会長が決定を下すこと、などが定められていた。

● 「バックフィッシュ」—少女読者のアイデンティティ

少女読者たちは『クレンツヒェン』誌面で、あるいはまた上記のように読者同士で実際にクレンツヒェンを結成して、互いに交友を深めた。彼女たちは互いに「クレンツヒェン姉妹」(Kränzchenschwester) としての意識を共有し、読者同士のやりとりはしばしば「クレンツヒェンの挨拶を送ります」(Kränzchengruß!) という言葉で締めくくられた。「グヴェンドリーネ」という読者は、クレンツヒェン賛歌ともいべき詩を寄せている。「殿方ばかりでなく、私たちも陽気に集いたい。殿方が幾度も杯をワインで満たすなら、私たちはコーヒーを飲み干そう (…)」とこしえ

に輝け、青春のバラ色の光よ、人生の明るい春よ！」(第4巻1号)

こうした『クレンツヒェン』読者としての仲間意識の他に、彼女たちを結びつけていたものは、「バックフィッシュ」(Backfisch)としてのアイデンティティである。バックフィッシュとは、漁師が小さすぎる魚を釣り上げた場合にその処分に迷い、船の「バック」と呼ばれる場所にとりあえず入れておいたことに由来して、まだ将来の決まらない未婚の少女を指す言葉である。

「クレオパトラ」というペンネームの読者が寄せた「バックフィッシュの生活」と題する詩は、少女たちがバックフィッシュ時代をどのように見ていたかをよく表している。

「バックフィッシュの生活ほど／すてきな生活はない！／それは15歳で始まる／なんという至福の時間！／ああ、かくも自由に／笑いつつ、たわむれつつ、人生の道をかろやかに歩む。／(…)この世の苦悩など何も知らずに。／(…)それがバックフィッシュの生活！／天よ、どうか／この生活がまだ長く続きますように！／明日何が来ようと／不安も悩みもなく／私たちは生きる、至福の喜びのうちに」(第4巻6号)

投書欄で読者が自ら名乗るペンネームにも、「バックフィッシュの池」、「ボンに住む三人の陽気なバックフィッシュ」というふうには、「バックフィッシュ」を取り入れた名は多い。その他、「お転婆娘」、「お天気少女」、「笑い上戸」、「バルト海の人魚」、「ロシアのクマ」、「犬のママ」といったユーモラスなものや、「おバカさん」、「不平屋」、「悪魔ちゃん」、「本の虫」、「青鞥博士」のようにシニカルなもの、「野バラ」、「スマレ」、「ワスレナグサ」、「エーデルワイス」のように花の名前を用いたもの、「ジークフリートとブリュンヒルデ」、「いばら姫」、「ドン・ファン」のように有名な物語の登場人物から取ったものなど多岐にわたる。こうした多様なペンネームはとりもなおさず、少女読者たちの自己理解を示すものといえよう。すなわち、美しいもの、ロマンチックなものに憧れる一方で、少年のようにやんちゃでお転婆な部分を多分に持ち、知的で機転の利いた弁

舌、時に「毒舌」を披露する。これらの一見相容れないさまざまな性格は、アンビバレントな（期待を課される）少女時代そのものといえるのではないだろうか。

大人の女性になるまでのいわば猶予期間としてのバックフィッシュ時代においては、少々のお転婆は許容され、むしろ魅力としてポジティブに評価された。「褐色の水の精」というペンネームの読者に、編集部は次のような助言を与えている。「自然な快活さを抑えようとする必要はありません。あなたくらいの年齢の若い女性がある種の子供らしい元気さや無邪気さを残しているのは、むしろとても素晴らしいことだと私たちは考えます」（第4巻11号）。編集部のこうした少女観は変わることなく、それから十数年後の読者からの問い合わせに対しても、編集部はまったく同様の言葉を返している。²一方、「悲しみに沈むスイスのバックフィッシュ」と名乗る読者に、編集部は「なぜそんなに悲しいのですか？バックフィッシュにはまるで似合いませんよ」（第4巻3号）と応じ、また自らの作品を送ってきた読者には「なかなかよく書けています、ですがバックフィッシュには…まあまあ、なんて深刻なのでしょう！」（第4巻5号）と軽くないなしていることから分かるように、「バックフィッシュ＝陽気、快活、無邪気」という固定的イメージがそのまま幅を利かせ、それにあてはまらない性格はふさわしくないものとして退けられる傾向にあった。

「マイフィッシュ」（五月の魚、の意）なる読者が寄せたこの詩は、大人の女性と子供という相矛盾する要素を併せ持つバックフィッシュの本質と同時に、当時の一般的な結婚観をも示している。

『バックフィッシュ』って何のことか、みんな知っている？／それは

² 「あなたは自然な快活さを抑えようとする必要はありませんし、だれもあなたにそんなことを求めたりしないはずですよ。むしろ逆に、あなたくらいの年齢の若い女性がある種の子供らしい元気さや快活さを残しているのは、大変素晴らしいことなのです。」（『クレンツヒェン』第18巻）

びちびちした陽気な生き物／半分は思慮深い乙女、半分は子供／ときに
いたずらで、むら気。／バックフィッシュの年月は飛ぶように過ぎる／
魅力的な乙女の五月はゆたかに花開く／ゆえに人はかの乙女を／甘きマ
イフィッシュ（五月の魚）とも名づけたのだ／けれどももし五月のう
ちに／乙女の手をとる若者が現れなければ／マイフィッシュ（五月の魚）
はとうとう／大きなおそろしいハイフィッシュ（サメ）になるばかり」
（第9巻2号）

陽気で無邪気なバックフィッシュ時代の次には、結婚というロマンチ
ックで自明の「ゴール」が期待されていること、しかし不幸にして結婚
できない場合にはオールドミスとして世間の嘲笑を浴びるものと少女た
ちが了解していることが読み取れる。バックフィッシュ時代とは一時的
なもの、過渡期にすぎず、後には成熟した女性としての義務が待ち受け
ている。少女たちは将来への期待と同時に不安を抱き、「幸福な」現在に
できるだけ長くとどまりたいという、一種モラトリアム的な志向を持っ
ているように思われる。バックフィッシュ時代がかりそめのものである
ことを知っているからこそ、その只中にある現在を美化する。このよう
に少女たちが、自分の置かれた状態をすでにある程度客観的に見ている
ことは注目に値する。

● 「クレンツヒェンおばさん」

「クレンツヒェン・ポスト」と名づけられた投書欄は、「クレンツヒェ
ンおばさん」なる人物によって運営されていた（図2）。かつて自らバック
フィッシュであり、現在はバックフィッシュの年頃の娘たちを持つ中
年の女性とされる「おばさん」は、ある時はユーモラスに親しみやすく、
またある時はある程度の厳しさをもって読者に接した。第4巻の投書欄
には、クレンツヒェンおばさんのことをうたった読者の詩が掲載されて
いる。「私がこの世でいちばん好きなおばさん、それはクレンツヒェンお
ばさん。喜びも悲しみも、バックフィッシュの心をよく知っているのは

だれ？善いもの、美しいもの
 に向かって、つねに私たちが
 優しく教え導いてくれるのは
 だれ？それはクレンツヒェン
 おばさん。私たちの愛をおば
 さんに捧げ、皆で唱和しまし
 ょう、声高らかに。クレンツ
 ヒェンおばさん万歳！」（第4
 巻17号）

読者たちはまだ見ぬ「おば
 さん」についてあれこれ想像
 をふくらませ、「おばさん」
 の家族の消息を尋ねたり、「おばさん」の自筆原稿や写真がほしい、「おばさん」に会いたい、といった投書をたびたび編集部に送った。

「あなたの想像するおばさんは、やさしく穏やかで、信頼できそうな顔と、きれいな白髪、ですって…まあ、大体そんなところでしょう。ただし髪はまだそんなに白くありませんよ、ちらほら生えてきたくらいです」（第11巻3号）

「お尋ねいただいてありがとう、娘たちは元気です。いま学校のランドセルを手直しているところです。もう少しすれば夏休みも終わり、また熱心に勉強しなければなりません。一番上の子はもうじき本物のバックフィッシュ、いまからせっせと絵葉書を集めています。ザビーネもとても達者にしています」（第11巻2号）

また、クレンツヒェンおばさんに会いたいと切望するグラーツ在住の読者に対しては、「そんなに慕っていただいて、おばさんは困ってしまいます。もしかしたら、いつか休暇の折にグラーツを訪れることもあるかもしれません、そうしたらあなたにもお会いして、一緒にあちこち見てまわりましょう。（…）それまで達者でいたら、ザビーネもお伴させまし



図2：『クレンツヒェン』第4巻、投書欄
 「クレンツヒェン・ポスト」の口絵

よう、でもそれはまだまだ先の話です、その間にあなたは大人のお嬢さんになって、おばさんのことなどとうに忘れてしまっているでしょう」(第4巻20号)と結局のところはぐらかすような答えをしている。ちなみにザビーネとは、クレンツヒェンおばさんに長年仕える忠実な老女中とされ、不適當な投書を容赦なく「ゴミ箱」送りにする人物として、読者から恐れられていた。

このようにクレンツヒェンおばさんは、バックフィッシュの良き理解者・仲間として登場し、読者たちといわば「家族ぐるみ」のやりとりをすることで、より親密さを深めていった。しかしながら、このように読者の人気を集めたおばさんの正体は、じつは雑誌の編集責任者であるヨハン・カルテンベック (Johann Alfred Kaltenboeck) という男性であった。次第に読者の間にも、「クレンツヒェンおばさんにはもじゃもじゃの口ひげがあるらしい」という噂が洩れ伝わっていったが、それはかえって雑誌の人気を高めただけだったという。³

読者にとって親しみやすい「クレンツヒェンおばさん」という人物を造形し、読者を家庭的な交流に誘うと同時に、雑誌側は購読者を増やすためにさまざまな策を講じた。新しい読者を紹介した者には、『クレンツヒェン』特製の腕輪やお菓子入れ、同社発行の書籍などが贈られることになっていた。4巻の投書欄ではたびたび1/2ページほどのスペースを読者紹介キャンペーンに充て、景品としてクレンツヒェンおばさんの肖像が刻まれた銀製のお菓子入れのイラストを載せている。また、毎年クリスマス頃には手芸コンテストを行い、入賞者の氏名・年齢・居住地を誌面で発表するとともに、手芸道具や書籍などの賞品を与えた。応募の際には、18歳以下の予約購読者であること、作品を読者自らが作ったという両親の証明書を添付すること、材料費が一定額以下であること、などの条件が付けられていた。特に希望がないかぎり、応募作品は貧しい子供

³ Adolf Spemann, *Wilhelm Spemann*, 1942, S.178

たちのクリスマスプレゼントに供された。さらに18巻からは趣味の写真コンテストが加わり、同じく上位入賞者に賞品が贈られた。ちなみに18巻のコンテスト入賞者は手芸部門約200名、写真部門約100名であった。

● 読者間の交流

読者の投書活動全体は、当然ながら編集部の監督下に置かれていた。読者同士のやりとりをクレンツヒェンおばさんが仲介する場合もあれば、初めから手紙をそのまま引用する場合もあった。「『ネクタイ王』あてに『小娘さん』から次のようなお便りが来ています。あなたはご自分の先生にどんなプレゼントを贈ったらいいかとお尋ねだったでしょう？あなたの写真を撮ったら素敵じゃないかと思うのですけれど、キャビネット版で。それからその写真のまわりに、感じのいい額縁を付けたらどうかしら。(…)先生はきっと喜んでくださると思うわ」(第4巻1号)。手紙が長すぎたり、似通った投書をまとめて紹介する場合には、おばさんが内容を要約して伝えた。

上記のようなおしゃべりだけでなく、文通や物品の交換に関しても、当初はかなり大らかに、あくまで読者本人が文通相手や特定の物品を募集していた。たとえば、「親愛なるクレンツヒェンのお姉さま方！クレンツヒェンの楽しい通信を読んでいるうちに、私も皆とおしゃべりしたくなりました。私は14歳の駆け出しのバックフィッシュ、名前はヒルダ、いつも陽気で快活です。どなたか私と文通しませんか？できればグラーツの方と」(第4巻19号)といった具合である。

ところが次第に読者間の手紙や物品のやりとりについて、編集部と両親による監視が強化されていく。まず文通希望は差出人の完全な住所を明記してあるもののみ掲載するという編集部の決定が伝えられ、さらに「両親の」住所を明記すること、両親の許可書を添付すること、という条件が付けられた。それが最後には、両親が娘のために文通相手や物品を探す、という体裁になった。「文通希望が以下の両親の住所のもとに寄せ

られています。フィッシャー夫人（娘マリー）、バイロイト市カンツライ通り10番地（リガのエステレ、シュベツサルトのエルゼ、スイスのお転婆娘、15～17歳のフランス人の少女と）。トイチュ夫人（娘マリー・ルイーゼ）、ハンガリー、ブラツソー市ヴァイゼンハウス通り28番地（あわせて写真、絵葉書の交換も求む）」（第19巻22号）。また、物品交換の際には返礼の義務があることを忘れないよう、編集部が再三断っている。こうした変化の背景には、過去にたびたびトラブルが生じたという事情があった。第21巻の投書欄の冒頭には、編集部からの次のようなお知らせが掲げられている。「自分の名前と住所を明記せずに相手の住所を尋ねることにより、これまでさまざまな不都合や誤解が生まれました。したがって、他のクレンツヒェン姉妹と連絡を取りたい人は、今後は自分の両親の住所を明記するように。両親の同意書がないものは一切取り上げられません。」（第21巻28号）

こうした制約にもかかわらず、読者同士のコミュニケーションは成立していた。投書が掲載されてから何号か後に、他の読者からの返信が出た。上述のように、ある読者からの問い合わせに答えてプレゼントの提案をしたり、自分の属するクレンツヒェンの規約を教えたり、あるいはまだ誌上ペンネームのない読者からの、自分の性格にふさわしいペンネームを付けてほしいという依頼に答えて、別の読者がいくつかの名前を挙げたりしている。

雑誌によって結ばれた読者間の友情がどのような性質のものであったかを、次の投書はよく示している。

「親愛なるクレンツヒェンおばさん！クレンツヒェンのたくさんの姉妹たちを見習って、私も今日おばさんにお手紙をお送りします。（…）あなたが雑誌『クレンツヒェン』を世に送り出してくださったことに、二人の少女が心から感謝しているとお聞きになったら、最愛のおばさん、あなたはきっと喜んでくださると思ったからです。その二人というのは、文通相手のS・Wさんと私、E・Dのことです。私たちが『クレンツヒ

エン』を通して出会い、お互いのことを知り、愛するようになってから9ヶ月になります。(…)これは真の愛情、生涯にわたって結ばれた友情です。これもすべてあなたのおかげです。私たちはそのご恩をひしひしと感じています。親愛なるおばさんに、もう一度私たちの心からの感謝を。これから大人になっても、私は『クレンツヒェン』と共に過ごした時を、いつも喜びをもってふりかえることでしょう。」(第4巻9号)

誌上で結ばれた読者間の友情は、時として誌面の枠を越えて、現実の個人的な交流へと発展していった。同じ町に住む読者にクレンツヒェン結成を呼びかけたり、スケートのシーズンが来たので、クレンツヒェンの腕輪をしてスケートをして、読者であることをお互いにわかるようにしましょう、と提案したりしている(第4巻13号)。雑誌を通じて文通するようになった読者たちが、夏休みなどを利用して文通相手を訪問し合うこともあった。また、もうじき寄宿制女学校に入学するので、同じ学校に通う予定の読者がいたら友達になりたい、引っ越すのであらかじめ現地に友達を作りたい、休暇中に旅行するので旅先の読者と現地で会いたい、といった投書もしばしば見られる。

また第17巻から第18巻にかけては、投書欄における物品交換の是非について、読者の間で数ヶ月にわたって論争が繰り広げられている。「シユティップス」と名乗る読者が、読者たちの物品の蒐集は無駄だと批判したことに端を発し、それに同調する意見と反対する意見とが相次いで掲載された。批判する側からは、捨てるしかないような物を集めて何になるのか、蒐集するのは勝手だが、そのためにクレンツヒェンおばさんや読者たちを煩わせるのはやめるべきだ、皆が集めるから自分も集めるという考えはおかしい、とか、クレンツヒェン・ポストが退屈な交換希望だらけになってしまった、バックフィッシュの活発な精神はどこへ行ってしまったのか、この世にはもはや錫箔や広告イラストしかないのか?といった意見が寄せられている。これに対し蒐集を正当化する側の意見としては、錫箔を集めて寄付すれば貧しい子供たちのクリスマスプ

レゼントになる例が示すように、世の中の役に立つ蒐集もある、といった意見や、人間だれしも情熱を傾ける対象を持っているものだ、と蒐集という行為自体を弁護する意見が出る。全体として蒐集を批判する投書の方が数も多く、雄弁である。この論争に際して、編集部ははじめ控えめに、最近投書が殺到して対応しきれないこと、スペースの都合から物品交換の依頼は少し遠慮してほしいこと、投書は短くまとめてほしいことを伝えるにとどまっていた（第18巻3号）。しかしやがて、ある読者から寄せられた投書—当時の少女小説の典型である『じゃじゃ馬娘』（*Der Trotzkopf*; 1885）⁴の主人公イルゼそっくりの口調と、その名も「怒った小悪魔イルゼ」というペンネームでもって、物品の蒐集に熱を上げる読者たちをからかい、くだらないことはやめるべきだと忠告する内容の手紙と詩が「クレンツヒェン・ポスト」の冒頭に引用される。

「大好きな、だれよりも大好きなおばさま！ ああ！ やっとできたわ！ 骨が折れたのなんのって！ 靴下をつくろう方がまだましよ！ どうか聞いて、読んで、驚いてちょうだい、おばさま、なんと私が、この私が詩を作ったのよ！！ 出来はどうかって？ もちろん！ だってちゃんと韻は踏んでいるもの！ 親愛なるクレンツヒェンの皆のコレクションが、私にこんな、詩を作るだなんて絶望的な真似をさせたのよ。あまりに重労働で、ペン軸をまる一本かじってしまったくらい。でもそろそろこのあたりで、最高に素敵なおばさま、私のたわごとを書きつけてみることにするわ。ねえ、おばさま、この詩をもうじき『クレンツヒェン』に載せて、分別ある読者の皆が、無分別な蒐集をやめるようにしてくださるわね？（…）」（第18巻5号）

このような投書を投書欄の冒頭に堂々と掲げたことから、編集部の

⁴ Emmy von Rhoden, *Der Trotzkopf. Eine Pensionsgeschichte für erwachsene Mädchen*. Stuttgart, 1885. 『じゃじゃ馬娘』は1913年までに65版を重ねた大ヒット作品である。バックフィッシュ小説の「古典」として今日まで読みつがれており、1983年にはテレビ向けに映画化もされた。Gisela Wilkending (Hg.), *Kinder- und Jugendliteratur. Mädchenliteratur*. S.527f.参照。

意向は知られよう。その後さらに、不毛な物品交換の代わりに、意義深い質問をしたり、さまざまなテーマについて意見を述べ合うようにクレンツヒェンおばさんから読者に言ってほしい、そうすれば多くの人に不幸な蒐集や交換をやめさせ、もっと高尚な目的に向かわせることができるでしょう、といった趣旨の投書がつづく（第18巻6号）。そしてしばらくして、クレンツヒェンおばさんからある読者への返信として、「よくぞ言ってくれました。蒐集に熱を上げている読者たちが、空いている時間をもっと役に立つことに充てた方が自分のためになる、と次第に悟ってくれることを私たちも望んでいます」（第18巻16号）という短いコメントが載せられる。しかしこのコメントは返信として、あたかもついでのように、しかも投書欄の最後のページに、他の通信の間にまぎれて出されているにすぎない。先の読者からの投書の引用とはあまりに違う扱いである。まずは読者の自由を尊重して好きなように議論させ、最後に編集部としての意見を述べた、と受け取れなくもないが、そもそも投書の選択や配置の仕方にも編集部の意図は働いていたはずである。これ以後も交換依頼がゼロになることはなかったが、明らかに数が減り、かつての熱に浮かされたような感じはなくなって、蒐集をめぐる論争はとりあえず決着がついたように見える。

● 読者から雑誌へ

雑誌側は読者の反応にいちいち耳を傾け、その要望をある程度取り入れながら誌面を構成していった。そのことは、読者の手芸作品を發表してほしい、とのリクエストに答えて、投書欄内でそれらを紹介することにしたり、ある目的に合った戯曲を掲載してほしい、と希望する読者に、バックナンバーを見るよう指示したりしていることから分かる。読者の関心に応じて、新たに記事を割くこともあった。「あなたからの質問を受けて、私たちはこのテーマに関して特別に記事を設け、その中で論じることになりました。掲載までもうしばらくの辛抱を」（第4巻3号）。

そうして単に間接的に読者の意見が反映されただけではない。投書欄の中には、読者自身の作った詩やなぞなぞが毎号のように掲載されたし、自作の詩があると書いてきた読者に、投稿を促すコメントもたびたび見受けられる。「詩を送ってくれたら喜んで受け取ります、ただし出来が悪ければゴミ箱行きですよ」(第5巻4号)。また、詩を投稿してきた読者に対し、投書欄でその詩を掲載すると併せて、すぐれたドイツの詩を読み、修養を積むべきこと、基本思想を単純明快に述べる能力や、豊かな語彙を身につけるべきこと、リズムと論理性、母国語を自在に操れるようになるべきことなど、懇切丁寧な助言を与えたりもしている(第4巻14号)。第11巻の投書欄の最後には小断のコーナーが設けられ、「寄稿者求む」(Mitarbeiterinnen erwünscht)として投稿を募っている(第11巻2号)。

さらに時として戯曲や旅行記などの優れた投稿作品が、投書欄ではなく、本文中に掲載されることもあった。雑誌本文を見ただけでは、それが読者の作品であることは特に明示されていないため、ともすると見落としがちなる事実であるが、たとえば「野火」というペンネームの読者からの投稿について、「とりあえず編集部の書類棚に入りました。いずれクレンツヒェンに登場するかもしれません。あなたの描写どおりなら、大海原を越えていくのはすばらしいにちがいません！」(第11巻1号)とのコメントを述べたり、読者「L・G」からのリクエストに「ちょうど今号に、クレンツヒェン読者の筆になる婚礼前夜用の戯曲を掲載しました。あなたのご希望に沿うかもしれません」(第11巻3号)と答えたりしている。自分の作品が採用されることは、投稿者にとって大変な名誉であったにちがいない。一方、この雑誌の枠を越える投稿に対しては、「あなたの詩のテーマはあまりに高尚すぎて、私たちの批評しうるところではありません」(第5巻1号)、「とても魅力的によどみなく書けていますが、この雑誌の目的にはそぐいません。原稿の返送を希望する場合は、正確な住所を知らせてください」(第11巻1号)というように、はつき

りと拒否の意を伝えている。

『クレンツヒェン』の本文には、女教師や医者、学者とならんで、女流画家や女流作家などの芸術家になろうとする少女を主人公とする物語がたびたび掲載されており、そうした職業に憧れる読者も少なくなかったろう。しかしながら雑誌側は読者の書く試みを積極的に促す一方で、それを職業にすることまで無条件に奨励したわけではない。むしろ読者「ローレイ」への以下の返信に見られるように、まずは少女としての義務を忘れないよう忠告し、戒めている。「あなたは詩人の狂気にとりつかれた、たとえ古典作品の列に加えてもらえなくとも、一生詩作をやめないだろう、と言いますが、詩作に没頭するあまり、日頃の義務を怠ってはなりません。いつか『狂気』があなたを去ったとき、ひどく後悔するかもしれませんよ」(第11巻2号)。このことは上記の物語の主人公たちが、(しばしば結婚という別の「職業」を見出すことによって)志をまっとうせずに終わる筋書が少なくないこととも一致している。

そもそも女性の本来の使命とは妻となり母となることである、というのが当時の女性観であり、女性の職業は結婚との二者択一の中で語られる傾向にあった。また『クレンツヒェン』読者たちの属する上級階級では、女性が働かず済むことが伝統的に一種のステータスと見なされてもいた。結婚年齢の上昇と婚姻率の低下といった社会状況の変化に応じて、上流階級の娘たちも徐々に就業の道を模索しつつあったものの、それもあくまで女性に「許容された」職業選択の範囲内であり、天分の問題は別にしても、男性と肩を並べる専門的・創造的職業に就こうとする際の困難は相変わらずで、既婚の女流作家の場合には、妻・主婦としての本来の勤めをきちんと果たしているという「言い訳」をして、自己の作家活動を正当化するのがいまだ通例であった。著名な女流作家クレメンティーネ・ヘルム (Clementine Helm; 1825-96)⁵ がクレンツヒェン・ポストに寄せた手紙も、そういった意味で興味深い。「私のところには絶えず若いお嬢さんたちから、クレンツヒェンに掲載された宛名を記した手

紙が届きます。ですがこれは誤りですので、訂正をお願いします。私の名前はフロイラインではなく、フラウ・クレメンティーネ・バイリヒ、旧姓ヘルム。住所はクアフルステンダム 140 番地です」(第 5 巻 1 号)。読者が雑誌編集部だけでなく、作家個人に直接手紙を書くことはよくあることで、クレンツヒェン・ポスト内でもしばしば読者からの問い合わせに答えて、作家の住所を公表している。すでに 40 冊近い著作を発表していた「大作家」ヘルムが、未婚の女性につける敬称である「フロイライン」ではなく、既婚女性の敬称「フラウ」に改めるよう、わざわざ断っているのである。こうした時代を背景として、『クレンツヒェン』投書欄の中から、果たしてどれほどの作家および文筆業に携わる女性が育っていったのかを検証することは、今後の課題の一つである。

4. まとめ

以上見てきたように、投書欄は保存状態の悪さ、編集部による投書の取捨選択といった基本的な制約があるとはいえ、読者の実体や雑誌への反応など、雑誌がいかにも動的に形成されていったかを伝え、雑誌の全体像を補完する情報を与えてくれる、きわめて興味深い資料である。産業化による女性の職業選択肢の拡大、都市や海外への憧れ、写真術の普及に伴う読者の肖像写真の登場と写真コンテストの開催など、筆者が入手できたわずかな号だけを見ても、読者の関心は時代とともに確実に移り変わっており、その意味で投書欄はまさに時代を映す鏡である。二度の世界大戦の前後に読者がどのような投書を寄せていたのか、ということも非常に興味を惹かれるところである。さらに読者の用いる語彙や文体の変化についても、もっと長期的に跡付けられればと考えている。今後も可能なかぎり投書資料の収集に努め、詳細な検討を重ねていきたい。

⁵ 彼女の代表作である『バックフィッシュの苦悩と喜び』(*Backfischchen's Leiden und Freuden*; 1863)は、ローデンの『じゃじゃ馬娘』と並ぶ少女小説の古典的作品とされる。